閉会の辞

経済学部教授
厳　成男 氏

○嶋原　それでは、これより閉会のご挨拶に移りたいと思います。閉会のご挨拶は日本語教育センター副センター長、経済学部教授の厳成男先生よりちょうだいいたします。厳先生、よろしくお願いいたします。

○厳　ただいまご紹介にあずかりました日本語教育センター副センター長の厳成男と申します。実は私自身、留学生として日本に来て勉強し、学位を取って、いまは日本の大学で教えているわけですので、本日の皆様のお話は、自分の話が半分ぐらい混ざっているようで、大変よく理解できましたし、感慨深いものもありました。そういう意味で、遠路はるばる遠いところからいらっしゃいまして各国における日本語教育の実情や日本への留学動向に関する最新のお話をしてくださった海外からのパネリストの皆様、そして学内からパネリストとして参加してくださいました先生方に深く感謝を申し上げたいと思います。本当にありがとうございました。

近年、大学における留学生の受け入れ形態がますます多様化する中、本日のシンポジウムでは立教大学における正規学部留学生の受け入れ、および受け入れ後の日本語と専門教育の実態と課題について虚心坦懐な議論を行いました。私が所属している経済学部ではここ何年間において正規学部留学生の受け入れを拡大しておりまして、実際授業の中でもたくさんの留学生と接する機会があります。その際にいつも感じているのが、日本語能力の重要性です。つまり、立教大学におけるアクティブラーニングや専門科目の履修は、留学生たちが大学に入学するために受けた「日本留学試験（EJU）」において評価された日本語力を遥かに超える語学力を必要としているのです。入学してから日本人の学生と同じクラスで文

章を読み、レポートを書き、またディスカッションに参加するためには、どうしても高度な日本語力を身につけていなければなりません。もし最初の一、二年生の時に日本語力の不足によって成績が振るわず、また学びの楽しさを感じることができなければ、その後の高度な専門科目の授業にますますついていけず、途中でギブアップしてしまう留学生がますます増えていくのではないでしょうか。そういう意味で、私は留学生教育の第一歩として充実かつ有効な日本語教育を提供できるか否かが、これからの留学生受け入れと教育のカギを握っているのではないかと考えております。

最後になりますが、本日のシンポジウムのはじめに、立教大学国際化担当の池田伸子副総長より、留学生の受け入れを拡大し、また受け入れた後は責任をもって充実な教育を提供するためには、学内各部署が支え合いながら取り組んでいく「覚悟」が必要と指摘されましたが、私たち日本語教育センターは、そのような覚悟を強く持っておりますし、これからも留学生受け入れと日本語教育の先頭に立って邁進していく所存でございます。

最近は、働き方改革だったり、ワーク・ライフ・バランスだったりが盛んに言われておりますが、このような土曜日に開催することになりました本シンポジウムに半日もかけて参加してくださった皆様に深く感謝を申し上げ、閉会の挨拶とさせていただきます。本日は長い時間、ありがとうございました。

○**嶋原**　厳先生、どうもありがとうございました。

これをもちまして、本日のシンポジウムを終了させていただきます。本日は長い時間にわたりご静聴いただきまして、まことにありがとうございました。